

# あいらの歴史と物語

発行責任者：始良歴史ボランティア協会  
会長 楠木 雅晴  
編集者：広報部長 竹之下 洲一

連絡先：〒899-5421 鹿児島県始良市東餅田 498

始良市歴史民俗資料館 Tel 0995(65)1553

## ガイド練習報告

## 蒲生史跡めぐり②



終野塔原五輪塔群

松元 淳一

県道 463 号線を北上して、蒲生ゴルフ場入口を過ぎ、左手の下野商店から右折し、終野橋を渡ると坂道になります。その坂を上り左脇道を 300m ほど進んだ所に、塔原の五輪塔群があります。そこに着くまでの小道や塔群の周囲が、以前来たときよりもきれいに清掃され、整然として落ち着いたたたずまいになっていました。聞くところによると終野信也氏をはじめ、地区の方々が共同で美化清掃をなされたとのことでした。この地区の方々の文化財愛護のお気持ちがいっぱい伝わってきて、大変気持ちよく見学できました。ありがたく感謝いたします。

この石塔群は、昭和 45 年(1970)、古石塔研究家黒田清光氏と蒲生史談会員の方々の熱意によって、五輪塔 38 基・七連板碑 2 基・舟形板碑 2 基が復元されました。五輪塔には、「明德 4 年(1393)知芳禅尼」と彫ったものや、応永 35 年(1428)のものなどがあります。東村充仁氏

宅の近くに塔原と同じころの五輪塔や、応永 9 年(1402)の一字一石経塚があります。この経塚については、『蒲生郷土誌』には、「童子戯聚のために建てられたことが、かすかに残る墨書から読み取れる」と記されています。

五輪塔は、地・水・火・風・空の五大を宇宙の生成要素と説く仏教思想に基づいて、平安時代に創始されたものとされ、構造は簡単簡明で装飾はなく、多くが武士層によって造立されました。元来は、堂落成・仏像開眼時の供養を目的としましたが、鎌倉時代以降は、先亡者の供養や墓石として造られるようになりました。地輪には造立趣旨・年代・人名などが刻まれることもあるようです。

今、この長い年月を経た五輪塔群説明板の傍らに立ち周囲を見渡すと、いにしへの「気」を感じ取ることができます。



## 蒲生どん墓

竹之内 和 仁

蒲生どん墓は、蒲生八幡神社から北東に 5km ほどの小高い丘にあり、周りを木々に囲まれ、静寂とした中に五輪塔が整然と並んでいます。

前列に、蒲生氏 8 代から 13 代の墓である五輪塔が並び、後列には誰のものとも分からない小振りのものがあります。

五輪塔の方形部分(地輪)には、<sup>ぼんじ</sup>梵字と敬白文が刻まれている、これで鎌倉末期から南北朝期の時代で、誰の墓であるかが分かります。また球形部分(水輪)は窪みがあり、火葬骨が納められていたとのこと。

この墓地にあった五輪塔は、幕末に発生した大洪水のとき、山津波により流されましたが、昭和になり現在地に移設し整備されました。



蒲生どん墓

8 代以前のものは、現在まで発見されていませんが、口伝によると下久徳の田の中に埋まっていると言われています。13 代以降のものは確認されていません。

島津勢に岩剣城・松坂城などの支城が次々と落とされた後、本城である蒲生城が落城しました。18 代<sup>のりきよ</sup>範清のとき蒲生氏は滅亡し、平安末期から続いた歴史に幕を降ろします。その後の蒲生一族について詳しい記録は伝わっていませんが、ただ墓所だけが歴史を刻んでいます。

## 舌出し田の神さあ

吉 田 茂 子

蒲生郷には、他の地域ではあまり見られない舌を出した「田の神さあ」が三体もあります。

その表情には、封建時代にあっても、年貢に苦しめられた農民の中から生まれたものとは思えない、くったくのない表情と、おおらかさが見受けられます。

その姿を見ると、笑いを誘われ、また踊りだ

したくなるような躍動感が伝わってきます。

唐芋や雑穀の“かゆ”ばかりの食の中で、信仰の自由もない農民は、阿弥陀様に手を合わせるような気持ちで石像をこしらえたの

でしょうか、それとも“苦しい時こそ笑え、辛い時こそ笑え”の気持ちでこしらえたのでしょうか。

写真の像を見ると、“たら腹飯を食いてえ”と言っているような表情に、苦しい中にあっても、ユーモアとしたたかさを忘れない農民の姿が伺えるような感じがします。



舌出しの田の神

## 鎮守の杜の中 楠田神社

本 多 幸 子

楠田神社について『三国名勝図会』には、「北村にあり、祭神<sup>つまびらか</sup>詳ならず」とありますが、蒲生氏が蒲生八幡を<sup>かんじょう</sup>勧請した保安 4 年(1123)以前は、蒲生の<sup>そうびょう</sup>総廟であったとされています。

ところが、楠田神社宮司家所管の『楠田神社記録』には、同神社を氏神とする楠田正義さんが、昭和初期に、「口伝によると祭神は市杵島<sup>いちきしま</sup>姫命・巖島大明神・祖々先霊神であり、創建は天平神護 2 年(766)である。」と言われたことが記載されています。しかしながら、祭神・創建にしてもまだ謎の多い神社です。

境内には、大きな杉の木が多くあります。その大きさや樹形の神秘さに、何となく「気」が漂っているように感じます。昔の歴史が想像できて楽しい場所です。



楠田神社拝殿



## 米丸マール

恒吉 一 洋

米丸マールは、今から 7~8 千年前にマグマ水蒸気爆発により形成された火口の跡です。

爆発後、噴出物のために周囲に低い環状の丘ができ、火口跡には川などから土砂が流入して平坦な盆地になりました。

昔から米作りが行われていましたが、泥水地で牛馬が入れないぐらいの不便な田でした。

そんな状態が長く続いていましたが、明治 35 年(1902)によりやく排水管が設置され、排水が始まると牛馬も入れるようになり、田も耕しやすくなりました。

昭和 59 年(1984)からは区画整理が始まり、今のような、高低差のゆるやかな整然とした美しい水田となったのです。



米丸マール

# 研修視察発表 大隅半島史跡

## 道隆寺と蘭溪道隆禅師

橘木 雅晴

国指定史跡高山城跡の南にある道隆寺は、寛元 4 年(1246)、肝付氏第 4 代兼員が、祖先の菩提寺として建立しました。開山は鎌倉時代中期、南宋西蜀(中国四川省)から渡来した蘭溪道隆禅師と伝えられています。禅師は、その後京都を経て鎌倉に上り、第 5 代執権北条時頼に出会い、厳格な純粹禅寺である鎌倉五山第 1 位の建長寺を開山しています。



道隆寺跡

建長寺管長以下高僧 9 名が平成 21 年(2009)にここを訪れ、建長寺開山様ゆかりの寺であると判断され、経を唱え慰霊されました。

境内に、島津氏久・元久・忠昌の逆修塔をはじめ、鎌倉時代から戦国時代に至る数多くの五輪塔や宝塔が残り、聖地として営まれてきた往古を物語っています。また琉球僧の無縫塔は大隅と琉球との交流の証しで、道隆禅師は宋から博多に渡来したのでなく、内之浦に上陸したとの説もあります。

## 土持堀の深井戸

竹之下 洲一

“いやじゃいやじゃ笠ん原はいやじゃ 五尋の綱を引く” 三方を川に囲まれながら、高い所で海拔 160m の笠野原台地は、約 6 千 ha の広大なシラス台地で、水不足のため永い間人間が入り込むのを拒んできました。

台地へは、まず宝永元年(1704)、苗代川の陶工たちが、次に天明 4 年(1784)、甑島の郷士たちが藩の人配政策で移住しました。その後島津一門・藩の重臣・近郷の麓郷士らによる抱地開拓が進められました。開拓地は「堀」と呼ばれ、今でも台地にそのなごりをとどめています。

さて、「堀」で一番の問題は、不足する水の確保でした。天水に頼るほか、深い所で 80m に達する井戸を掘っています。冒頭の里謡は台地の底から水をくみ上げる苦労を謡ったものです。中でも、串良町の土持堀の深井戸は、県文化財の指定を受け、直径 1m、深さ 64m で、人力では水をくみ上げることができず、牛につるべの綱を引かせました。牛が往復する「ツイ(つるべ)の馬場」も保存されています。



土持堀の深井戸



始良市内資料館などの収蔵品紹介①

### 加治木郷土館蔵「名山楼詩集版木」

竹之下 洲 一

先日加治木郷土館を訪ねたときに、島津重豪しげひでの従弟で、第6代加治木領主島津久徴ひさなるの『名山楼詩集』の版木があることを知りました。

この版木は、他の薩摩版の例にもれず非常に精密に造られ、現存している版木は初版および二版の61枚です。近世における薩摩藩の文化を知る上できわめて貴重なものとして、昭和29年(1954)3月15日県文化財に指定されました。



名山楼詩集の版木と初稿本

錦水(久徴の号)は、幼少から詩文に優れた才能を持ち、寛政12年(1800)に詩集を刊行しました。校訂は儒学者伊藤世肅せいしゆくです。錦水の詩風は唐・宋・明の格調で、端麗なのが特徴であり、詩句は厳格だがいくらか技巧的で、文は李王の影響を受けているといわれています。

久徴は郷校毓英館いくえいかんを設立するなど、近世の加治木における文化興隆に力を注ぎました。

なお、『名山楼詩集』は『新薩藩叢書(五)』に収めてあります。

### 平成23年度ボランティアガイド実施報告(5)

- ① 11月8日 医療生協始良支部23名様  
蒲生史跡ガイド (松元・橘木)
- ② 12月8日 新市歴史探訪Ⅱ講座生20名様  
加治木史跡ガイド (松元・藤崎・橘木)  
能仁寺墓地→精矛神社→日木山宝塔→  
日木山の田の神→南浦文之の墓→龍門  
寺坂→金山橋→隈姫神社→木田の田の  
神→実窓寺蹟→加治木島津屋形跡
- ③ 1月12日 新市歴史探訪Ⅱ講座生15名様  
始良史跡ガイド (宝泉・濱口・竹之下)  
白銀坂→平松城跡→山田の凱旋門→島  
津義弘居館跡→古帖佐焼宇都窯跡→帖  
佐郷地頭仮屋跡と納屋町

### 始郷(あいきょう)

横川ダチン

佐土原 保子

松原塩田で精製された塩は、加治木の港にあった専売所から小売に出された。塩は、馬の背に積まれ、溝辺・横川・栗野・菱刈・大口方面で、米・麦・大豆・そばなどと交換された。特に横川まで行く行商人たちは、塩との交換物を横川ダチン(駄賃)と呼んだといわれている。

当時は、ほとんどが自給自足の生活で、生活必需品である味噌・醤油・漬物・梅干などを作るには、塩はなくてはならないものだった。

### 目からウロコ？

恒吉一洋

「龍門司坂リウモンジザカじゃなくて、なぜ龍門司坂リウモンジザカなのですか」～始良に住んでいるとよく聞かれる。龍門司リウモンシヤキ・龍門の滝リウモン・竜門リウモン小学校～なるほど「龍門司」の呼称はおかしいのでは？

昨年12月の「ふるさと歴史講座」でその答えが見えてきた。この坂の上に龍門寺リウモンジという寺があったらしい。坂の名前はここからきているのではないかということである。

寺の実在が明確になればはっきりする。「目からウロコ」が真実となるかもしれない。

### 歴史用語解説

(竹之下 洲 一)

『無縫塔』 卵塔ともいう。鎌倉時代に禅僧によって輸入された墓塔である。

鎌倉建長寺には宋僧蘭溪道隆の供養塔がある。長卵形の形式が宗派をこえて流行した。

『抱地』 武士が薩摩藩の許可を受けて自費開発した、自作自収を建前とした田畑で、永代の土地所有が認められた農地をいう。租率は高一石につき米九升二合で、夫役はつかなかった。武士のみの特権として所有が許され、百姓の耕地や経営に支障のない場所での開発が認められた。天明4年(1784)、呼び名は持留から抱地に改められた。

編集後記 私たち始良ボランティア協会では、本年度一年間を通して蒲生町内の史跡研修に努め、9月には大隅半島の研修視察も実施してきました。今回の広報誌第15号ではこれらの研修成果の一部を報告いたします。

今後とも始良市内のよき史跡ガイドができるように、研さんを積み重ねていきます。皆様方のご支援をよろしくお願いいたします。